



圖書館藏  
卷之九

續平定回疆七篇卷之九

加多凌等小蔚山城圖

月

圖

桂正石を誘<sup>いざな</sup>めて明軍と驅<sup>き</sup>く圖

朝鮮を攻<sup>う</sup>め言<sup>い</sup>語

蔚<sup>ふる</sup>との城兵亂渴<sup>らか</sup>の圖

清正<sup>しよ</sup>の家臣<sup>しらべ</sup>平<sup>ひら</sup>右<sup>う</sup>摺<sup>くわ</sup>五<sup>ご</sup>敗<sup>ひ</sup>を假<sup>あ</sup>と<sup>す</sup>圖

好<sup>う</sup>く大明<sup>だいめい</sup>降<sup>こう</sup>ヒ乞<sup>う</sup>圖

特18  
1833  
81

清正智術漢南人の火炮と道を圖

明兵解圍退王敵詰

日 圖

吉川廣家漢南の大軍を破る圖

漢南勢級軍の圖

蔚山移株洋弓乃圖

清正吉川廣家と馬仰詰

日 圖

繪本志圖記七篇卷之九

加賀清正入蔚山城

加賀主計清正は西生浦<sup>セイヌカ</sup>に城を築きス櫓<sup>タカハシ</sup>張<sup>タカハシ</sup>又剣<sup>タケ</sup>て陣<sup>ジン</sup>をつ<sup>ス</sup>候<sup>ス</sup>。而<sup>ハ</sup>てかく小明の軍<sup>ヒガル</sup>蔚山城<sup>ヒガル</sup>と見<sup>カ</sup>か<sup>リ</sup>見<sup>カ</sup>朝<sup>ハ</sup>芳長<sup>ヒサキ</sup>を田<sup>ミ</sup>羅<sup>ラ</sup>守<sup>ム</sup>。彼<sup>ノ</sup>志<sup>ス</sup>守<sup>ム</sup>多<sup>シ</sup>蘿<sup>ロ</sup>葛<sup>カ</sup>して防<sup>ガ</sup>ざ<sup>ス</sup>。而<sup>ハ</sup>て<sup>ス</sup>清正良多<sup>ヨシマサ</sup>と集<sup>マ</sup>ら<sup>ヤ</sup>さ<sup>ル</sup>。而<sup>ハ</sup>て<sup>ス</sup>朝<sup>ハ</sup>芳長<sup>ヒサキ</sup>と石<sup>シ</sup>き<sup>テ</sup>思<sup>フ</sup>。息<sup>子</sup>芳長<sup>ヒサキ</sup>はして血<sup>ム</sup>の<sup>ミ</sup>よ<sup>リ</sup>強<sup>ク</sup>。而<sup>ハ</sup>て<sup>ス</sup>不<sup>思</sup>の<sup>シ</sup>勤<sup>メ</sup>き<sup>セ</sup>。そ<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>う<sup>ニ</sup>殺<sup>ハ</sup>む<sup>ハ</sup>。而<sup>ハ</sup>て<sup>ス</sup>と<sup>リ</sup>り<sup>カ</sup>へ<sup>ス</sup>。今<sup>ハ</sup>耳<sup>ア</sup>は<sup>ス</sup>。而<sup>ハ</sup>て<sup>ス</sup>蔚山城<sup>ヒガル</sup>を<sup>シ</sup>襲<sup>フ</sup>。討<sup>フ</sup>記<sup>ス</sup>ば<sup>シ</sup>再<sup>ヒ</sup>日<sup>ヒ</sup>幸<sup>ユ</sup>ゆ<sup>ク</sup>て<sup>ス</sup>、而<sup>ハ</sup>て<sup>ス</sup>清正<sup>ヒサキ</sup>と<sup>シ</sup>對<sup>ス</sup>。而<sup>ハ</sup>て<sup>ス</sup>蔚山城<sup>ヒガル</sup>の<sup>シ</sup>勝<sup>ス</sup>。而<sup>ハ</sup>て<sup>ス</sup>死<sup>ス</sup>。

弘<sup>ム</sup>義<sup>ヒ</sup>孝<sup>ス</sup>の<sup>シ</sup>蔚山



此の本幕へ連移すを日清ひが山立はるは風の脇邊の甲と敵  
し兜鎧胄又狼とて腕の目内殺とあつて大居首よゑる。喜興  
柄の長刀小腰とて此の船の船頭よ。南無妙法蓮華經の大旗  
と云。仁王立よかく兵卒とて細せよ。どろの威風だりと  
拂ひ鬼神のとく。又月久よたり明の軍兵は難と厄とや敵  
軍とは毛打り。城中は左加茂氏の清ひが山下をふとまと  
夷うどりよ。倭みけ清ひが山の種推とく。もとと馬に  
准う止めとて。もとと有うと。島とつみて。尼店。小清ひが山に方と  
大男え城へは。城のうへ百万の明兵を馬とみまつて。と勇  
氣自体よ百倍せうそれど。城や兵糧少く。おとと見といふ  
よせとと集うて謀し。アナルと敵に對する計策りとて。重  
く口を喰し。牙根も明人の清ひが山の後口よ。やにすうの眼  
お歎の太ね小勢とて。城よへをゆるくとある。すら城中よかと  
ゆるし何のヤモヤ清ひが山討殺しうは。城の事だくと。城うるよ  
口脇きのうと罵合や。小ひざやかと。圍して一表よせとて。城よ  
とくに面より。内附よ捕よを帰よ付て。とんとしろとまへ城の  
集ううごと。に仰く。内附よ捕よを帰よ付て。とんとしろとまへ城の  
放ナキと。放ち放砲と。炮。考も計策とりよけ夷の槍  
城中又御よ。敵て。落す。落さぬ二十余日。内ある。一度も利と  
得。うるうと附として。死乞の者うたへ。あ。近に。しのの大軍攻  
う。か。落として。とく。又。明の楊。部。の。ね。鄭。系。

清正大石

明軍  
破る圖



國人、うる者あり。楊福名より告てやうるに、然かを以て、僕んみは味  
方の兵士と換どりのうそと全まかへみぐらば、城中二万のみ人余  
る百姓あり。其糧の後、餘り多くえうじ味方の諸軍遠く圍  
し兵糧の盡ると、結ば一時又立功と立至じと云。楊福名歎んで走  
と日じ即時、諸ぬと合せ表はと引退き陣営立つて、福を  
ととまきを巻して、あらのむと割切食焉よとてし、うるうる

朝理立系ぢま至言説、薩正

山附蔚山の城中よりは、未粟脱よ盡きへとせんと送じうる  
すがも、スの多ひて渴とうる。堪え密月糧のあと汲み  
咽くうる。かくへども、陸の中よりは、數日糧する。記糧の多く流  
てあり、血の多い後、愈更に惡臭也。ぶどうしたれてへ色づくべくと  
志うのうる。大糧も盡もと馬と割牛と殺し、争ひて生と喰ひ  
殺し、城門と月牙井と明軍の配例、うち腰とそぐり、燈よ燒米牛  
の糞など捨ひて、み金の殊と得心地にて、贅々飢と志のぐと  
つへども、のうの飢渴よ苦し。ゆく堪忍ふぞれ有ふへ  
ひがひはみまと刀をもと慮せず、またうるに諸方の味方にま  
ど後、卷の物を出され、かく今日を経る。宿り、士卒へえも  
然くも餓死とし。武士の戰場よ屍と轍にりものうて何を  
思ひよとて、餓死ぬをいた。敵のたれば歎きあせ別らかで  
太明の軍ぬ楊福名が陣へきて、おせうるには、ふけ燃え捕虜殺す  
の合戦一度も後さとえばとくとく城中食盡て、方軍悉く死せ

渴死の圖

卷之三



んとて我を購むるを歸す。左は清正の義理と津んと欲  
て殺りへる軍を購とす。故に其軍の軍國と殺しゆづくんば  
日は城を出で陣系をどじと考ううううううううううううう  
敵が限りぬ。則若くやうらの大明軍と蔚山名々向ううう  
唯清正一人に依てのうなり清正若陣系又猶ううく何を軍  
卒と官士衆と從と仰うんや明日城の西面度控に押して我  
自、陣と受けしとく候とう。諸君はアノ刀をもふと前て  
大き小箇のほ正士卒と勵さんとく自懃して然陣よまう我先  
清正と西縛急ち乱と犯りて城中の軍國と廢はしあうに  
まよ功と委せしとく事かう大方をうじ清正も大き小箇  
び揚後人と連き得う。明日城外を對面せば、利執んで制殺  
えんと夜の明を待てう。清正元本しうと極て城中の兵士少  
彦と夜の明を待てう。急き清正ひ差てヤクシハ云明日城を出で明る揚  
稿名を利て記せんとてう。抑是何の心ぞや。左圖解大明  
左將軍ひ其功と全くもぐまく足下と長みとめてて詔と  
ゆうじく敵と出で敵を計んとし絶べども渠もすいううう  
ふ御と構へ何せず計とてもすんと知あううううう  
居れ厚と蒙り。清正は別を圖の御私厚を圖の御日年の厚  
より豊足下れがをうろきりのとせば。以て今兵糧盡き敵を  
守るを放じと恩されり。總軍一日よ宴て出一方とお膳  
釜山浦。右は諸ねと會し再び歎すも何のう道や。以て明日

信正家店  
旅次  
宿  
古橋至多

國

田

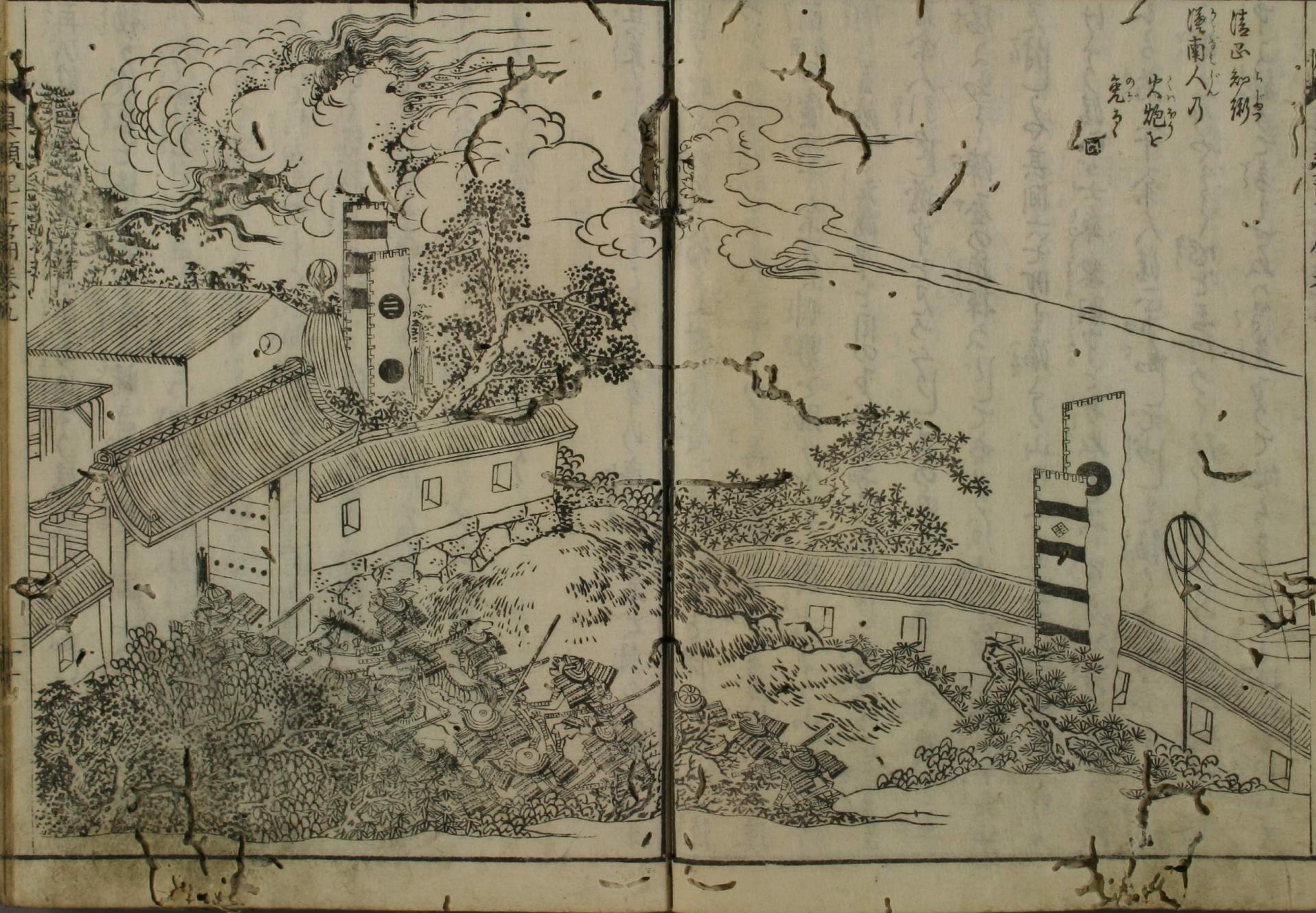
田



の出陣こそいひつけき計よりばやし難と歎してヤシ  
まされば清正理又体したよ感及ひまど若年少うと人  
が生寑よまたのにしき勇士うりうみ我謹て是下の陣は時  
ふ五しも明る朝再び楊福名が嘗て人を遣してまくらへ清正  
是日本の作縁たう何ぞ海をとむれと狗は降矣にきや候て  
徐と生捕はせん計幕をしげ海が体と力と小又條計と稱  
と我軍と夷討ん志りとえすれよ今日の出會は極止す  
きて馬上射對面すは我心体と聲首を立べきうと云せ  
を楊福名うきのよの軽びいとぞよ見く大吉小無う勝う至る  
うべ我軍押寄飢渴せ日本にて端渡せとく躍りと門そ  
ト急しと材木の良にて軍卒て安寧處て聞ふや心よ但せ  
皆く暖をのせと約一時よ勝負と斐し珍と諸の日よ達  
久之れば楊福名としづきゆゑ再び陣と争マタリけ附し漢  
南<sup>國</sup>軍兵六余万大明勢と助くると蔚山城より小の山の  
頂きよ陣を立隊中と目のみとおもわしわざと或夜追ふ兵卒三  
百余人引領し城中とアラグレショニの丸と三の丸との間廣いと  
場よ如く陣の指揮うじてゐる山の上より西洋砲と火門とあ  
見附しも其間六七町を隔てる山の上より漢南<sup>國</sup>人を同ふ  
けつては士卒忍耐中とおぬまとスハボルと称す碑これ  
の者三千余人はひよかしてかしも勤くうみづくに  
よおもげやとく呴とも所うちひよ山の漢南<sup>國</sup>人を同ふ  
中よ轟うてあもせぬの音先立つて的らううと申した向く

信臣御  
漢南人乃

火炮之  
兔



再び放河より三の丸の芦原へお返す。清正に於てはもじり  
勧うべしと信よ我を今い勝きぞと堅く制してありせど漢南  
人殺首先や下きとて又との方へ向けて放河を下さけ候ひと  
お通うてほよ歎とは中らざりうるが清正は附大馬小馬して令  
こそ發で引えとやとく小躰して幸丸へとまられが兵太守一日よ晴  
と喰ひく皆然先よ引へて漢南人城中の發効せらみとまを又  
て是をまた國より出づと云ひお出くらふ後丸を  
中ととゞのりと一人も兵卒無ぞとあゆく智術たゞ  
うりゆく城やこぞりと称歌ぞ

## 明兵解圍退王城

一

其年

正月朔日北朝は解りゆゑを去年十二月中旬より谷山浦を守り傳  
又蘿洲しうる日本の諸大臣、蔚山石守より急と告げ援兵を乞  
う頗る之をば諸方の軍勢合せ蔚山石守のゐとしと聞  
天守より少西於澤守後長八百余人を引率し、松濤と連て押  
使へ毛利秀元令吾中納言秀秋是多承政多其勢三万余  
人長曾我部元親勝須賀家正等に圍り軍兵二万五千余  
人其外志摩國守志摩九流等万余蔚山石守の邊  
山に里くよ陣とつて林家の旗風ひるぐり雲霞のとく  
をそろひ則正月朔日から大明の諸大臣と刀々を執りて  
舌とうほしたぬ楊鴻を解生人を軍お議して援兵の多勢後と  
立切城兵と挙合せて戦ひうば頗味方の羅武をうしを上をも



烈く轍皆空立つて今宵夜はまきれ熱軍曲と解て一度王城  
より軍兵とまどりまで計策と立ち押すにとく又為安政  
よりびきつけ附蔚山名の城中には月夜の後詔の聲追ふ所  
うと定しかば不下のね卒勇み脅ひあれ後卷の旗と見  
大切て出て明兵と折崩しげひの勢と敵せんりのとおとづる  
ぎくは附其夜ニ之の以明のあひ押よもとて敵方の  
無少を又御き國のあひと近くゆきりかどん城中の兵士もと  
や明兵の夜討をうそそえひよ引よせお殺せとく後地の御守護  
隙よしと並び前先をそらるるひくとさしども考もと敵  
て抑あくに却て發動もあまし神うる小燃中絶ひいゆり  
敵の手拂りやと終防禦のあへを固め息と活てたらむと  
川を震動し冷ほしきゆゑ身斗はし隊兵今ハ明兵の卷あら  
きんと行噛を舌で行ふて其のうち寂として人馬の声と度を  
是よよとく隊中絶絶ひとまくよ津波したが是ハ明兵  
我國の援兵と覺き圓と解く引退くものりくろん乍候と聞  
て便よとづぶたれ然又圓のあたよ多く火の光り刀々と被と  
を城中又防兵のを死にし今やあらうと船はれを急角し  
て走来し近敵ハ西洋砲敵ハ後砲あらひへ圓と覺し夜半  
ごく城兵とうやはしきる是ハ明ね是惟忠名茅圓云名をば  
計策とて城兵の追走ると恐と爲つて押よもとて備えあや

破と  
大軍の  
漢南の  
度容  
吉川



し西洋砲、狹砲の鄉も、まぎれ次第、  
さげ討毛利宰相秀元、蔚山より小の方をすらるき山、  
登り明兵とちうふとおもし陣とえてたゞし、がちうみの陣  
やひの外、強き孔生裏崩に、そよれ、津又カク、まごとハ、  
宍崩ても名にせよ、とよ後こそ、りと熱勢にて一万余人、  
どく喚して、一えまよ、通しき、其ゆえ、勝輪のどくる  
三ツ引輪の馬印にして、若大ぬ先づけ、馬と明軍の中  
へ馳入り、のと幸よ、前後、宍崩を右健左健と羅列し、  
忽一通の血湧と開き、猛威と震ふと、我ふと、鬼神のあく  
乃人、アタリ、吳惟忠、茅國、義人の兩味方の勢と引せんと、  
車、か喚き、叫んで、搖合、やく、小後巻、ゆゆひ、小西馬多  
長、我部勝復、が、志摩國、獨志摩等の勢、八方より、雲々已  
の家、十文字、又切き、並び、陣脚、動じ、明の、大軍、さんぐ、  
まざれ、右健左健、又逃れ、役、又、吳惟忠、茅國、義人、會と、  
防ぎ、獄ひ、村の兵士、六百余、人、小も、き丘、又引よて、兩の、とく、  
村、させられ、ばじり、小勇、し日本勢、じ、もて、又、合は、不、山  
とよ便し、漢南、国人、明軍の退き去と見て、今、叶ふほしと云程  
こそ、だま、十万、余、余、大軍の、傍へと、亂、さうと、崩、さく、ゆび、  
さう毛利の勢、ハ、漢南、国人、が陳せ、山の林、蘿、よ、屯せ、  
軒倒せよと、彼、三ツ引輪の馬印と、じ、うる、一番、よ討て、うる、  
者に、近、ち、漢南、国人、と、十人、手、切、を、さう、小漢南、国人、の、陣、や、  
れ、見、らる、武者、と、刀、く、眼、丸、く、口、方、よ、飽、ま、く、餘、す、ひ、う、男、の

漢南勢故法文軍の圖



まき馬よ勝モ兩の夕れ御と震ひ電光のどく轟轟とかの  
二ツ引廻の馬印に一ツ大ね槍伏とそなへぬひ戰ひ一寳よせん  
と突如に槍の穂先よ両刀と縁んで切そらひと馳寄て先向  
す切んと仄げ方のたる大きふ勢ひ槍伏とまとをとてこそ及  
しが玉らう身の手ち易様ひと刃せん漢南國人が右みの脇と討  
しあし余り切さき轍の元論又切付う何うへひてたまゝべき馬  
まうとうとあつた伏良もうけあ首とえう毛利秀元是と  
見くらむ討にえ續けよとひりう程よ一もの地勢廟のあら  
余はじと切まくさば漢南國人放て先へ進ひそのゆく南をにし  
引ひと長ち我部元親ひ勢と引て遂てそらるる後より切う  
まば討き者を殺とあらばんぐよやく落び絶縁よ爲私  
をす川のと我先よすうてひ踏抜てお庵に沈みるよき山  
と攀よれてひ深谷へ水を浴し嘔き叫ぶ下さまが力山御樹  
八寒大若の地獄ぢごくりきまゝくやとぞく争あらそう加茂主計政隆  
ふハ蔚山谷の塔とすれ合ひを冠すてしを指してやされ  
らの中圍勢のやよ二ツ引廻の馬印に一ツ武者こそありれ功の  
者うち誰すんぞ有成すやと人と来て同せたる小吉川翁人慶  
家と年既満あるれしき若者と徐隠してゐたりてに東  
朝の方より一ひとのま雲たうじき奉り乃ちう内よ燃のとよ敷  
う兵士を腰も無く月をばま雲ようで殺万の鷹の頭と並  
べて巣めぐらしが山野の方の河中よく行方をくうせずす  
は正諸軍とタクカタく我朝鮮よをす既よ七年いまさに國



は鶴の名のをもとへて日午天照を神ハ腰を作り  
加護とこそをもとといど城門と開き引ひ軍と追討  
のを並と是國人よ知れせやと自承先馬と驅けられが道  
ク走じもたからずがぞと城兵七八千人城戸を開ひと過  
くうる後卷に向ひ日午の諸君我ゆくじきも勢と引合  
しほふと諸兵よ逃ると退て斬殺又斬五百余級討捨  
くろ者其數と知らず以明ね是惟忠名萬圓益翁りうへ  
合也村とゆてさんくよ村と争ひして百里余りと  
裂く小今ハ倭兵の退者すと級軍と集ひて都城へこそを  
退きうけ附明軍の弓箭に捨てる馬武具鎧甲戈雜刀の如  
後既に免て足と入るを拒む日午人率え得村より  
心地て馬又深で車又狭城中又入へず

清正吉川慶家と馬印

加敷主計改清正明の大軍て悉く退去し今蔚山名の傍二三  
百里里程の歎の落ざ小刀とざるを諸陣へ人を弛後諸よむり  
山諸大將と城中よ清じて金万札とせて一生と得たりと恭  
附でよきし諸君リス籠城の困劣と歎ひ互にかうじの酒宴と袖  
船と感激よ終りうる事に御本船はくえへひ着き大内乃武  
勇と勵んまは馬武具の毛や小刀とぞとがめく美度の當  
印余り小刀盤盤などの止りすうそ遙同舟へうだそらば  
り勇君の家をなす候てひきまた印又久りとすれど家を

さんせん我日奉り舌しとどひをうりとも我家の事にあひゆ  
うて仕智めりたり呼びましと其便よ止てり。印の威風よ  
文備とおまほの馬蔭を我み揚げやと乞ひたる所はふたよす  
ひきづくえ生一廣易て乞うる所度が則我馬印も御とうる  
印の向き馬蔭ナリと遠家へまわる去後又明の太祖軍邢城名け附朝鮮の王城より逃  
て左々々小蔚山名のあひ後援の兵に忍と歎ひして王城より逃る  
を太祖が勢う乞全く楊福名が脇病によりては済名と矣圓とよ  
仰ぐる其眾一人よりアシテ明帝より參して楊福名官と削  
万世德名を立て乞代りめ再び軍勢となりし日本人在討せ  
一む先來の如梅名を立て中石の勢大ねと宣ら海峯名劉健名と左右  
のゐとめ陳澤名を水軍の太祖に居よりかみて軍兵と押出  
れ徐々小中治の太祖李如梅名の済山名と圓を居て一ヶ楊福名を  
指揮より心うじて王城を制し大の軍邢城名の外勢う  
のこもを脇病を表るるに思ひとばる如梅名は惜きゆゑどもひ日  
本の太祖をひ其勢六万余人再び蔚山名を抑ち先度の敵と  
雪んと城の内面と後捕の多くを圍み五二五三の素をうかつに先いと  
ほしく夕べうりに宿正をとからく太祖小多ひ明軍先の敵軍と心  
て再び推陥しとそ是れやと歎の傳への立ざる中より若者とも討く  
めて追うちせよとわめせず。しかし小てより勇を擧げ日序撃  
加義清を傍ら林隼人秋義安と飯田森平と先として一人爲る  
勇士の又文采人の兵車ともござれ城戸を開ひて嘔ひて逃出又荷  
旗の後炮を一向よどおうけらればよ猶地主に先照ア人のを



兵をとまと候す。家主とが明兵へ如き  
をもんじゆく。ゆく逃うたる色より日朝の諸大ぬ已  
お城を堅く守り。ねはよ急とそくひ面に逢ふ所にこそむ事  
ゆきと改りて明書と酒ら多磨城へ厚らきたるけ財日本勢  
捕へてろ城二十一ヶ石其の申よ抄ひく蔚山おきさん小口よあつてを日本  
勢第めいぢとしらう要不<sup>ト</sup>す。釜山浦ふくさん在て。天あま西にみ四川せん  
其中央うちうちう又また令吾秀秋さちひと小西こにし長志ながし慶圓けいげん吉慶よきよ等とう色いろとちり  
名色要害よきよの源地げんちにてに方の城じょうへア知し加くわへらふをす

繪本を圖記七篇卷之九總

繪本

